

# パワフルなおばあさん 地域を思う若者 農を生きる人たちと



**松田 恭子**

MATSUDA Kyoko

株式会社結アソシエイト 代表  
(東京都中央区)

**農**業法人などの経営改善・マーケティングや地域ぐるみの連携を伴走型で支援している。

最初の仕事は、つまものを生産する産地の新市場の探索だった。産地を訪ねて主力のおばあちゃんたちに話を聞くと、忙しい年末は徹夜で仕事し、旅行先できれいな紅葉を見つければ自分も植えて売ってみようとする。他方で閑散期になればロシアまで旅行に行ってくる。

いつまで仕事を続けたいかアンケートすると、多くが「ずっと」「死ぬまで」と回答した。健康に気を付けて無理せず生活するシニア像とはかけ離れたパワフルな姿に接し、この仕事を選んで良かった、間違いでは無かったと感じた。

最近では、若い世代と一緒に仕事をする機会も多くなった。ほとんど

の生産者が地域の役に立ちたいという価値観を持って仕事にのぞんでいる。

一次産業は家族経営の域を出ないといわれるが、地域に密着した生業的な産業だからこそ、地に足

って一緒に仕事できることがうれしく、どうやったら成果がでるか模索する日々となる。

**伴**走型支援とは、何だろうか。モノヤコトがあふれる現在、



©片岡 巖

がついたかたちで理念が仕事に反映されている良さもある。

農業法人で「送料別で良いですよね？」と顧客にしっかり交渉する若いスタッフ、<sup>ほくとつ</sup>朴訥ながら商談会でへこたれず来場者に声をかけ続ける漁協職員、新しい取り組みで軋轢が生じても「大丈夫っすよ」と淡々と前に進む若者、「目の前の仕事を毎日こなして借金を返すだけでなく、経営ビジョンをつくってみたい」と言う後継者、30人の従業員を束ね休日返上で事業発展に取り組む社長。きちんと生きている人と巡り合

若い世代はビジネスモデルやプラットフォームといった世の中の仕組みも意識して動き方を考えなければならない。

一周回って、シンプルなひたむきさや核となる本質的なものへの追求が共感を呼ぶ時代に、その魅力をどう見せてコミュニケーションするか。

生産者が成長に集中できるよう、ややこしい段取りや枠組みづくりを引き受けながらそのプロセスも伝えていくのが役割かなと、本来面倒くさがりな性格ながらあれこれ動いている。**F**

## まつだ きょうこ

民間シンクタンク、東京農業大学勤務を経て現職。地域の事業連携の構築、6次産業化、経営改善などを支援。農業経営アドバイザー東京連絡会幹事。好物は鮭南蛮漬や酸っぱいもの。



農業経営アドバイザーは農業経営者のニーズに対応し、経営への総合的的確なアドバイスを実践する専門家です。2005年、農業経営の発展に寄与することを目的に日本公庫が資格制度を創設しました。本コーナーは、上級資格である上級農業経営アドバイザーが執筆しています。